

# 複合文化学通信 第2号

「教室の外で楽しんでいることを、教室の中で学問にしておもう！」

このコーナーでは、教員と学生がどのようにして「教室の外で楽しんでいることを、教室の中で学問にしているのか」、教員と学生の研究テーマを順次紹介していきます。

「こんなテーマも研究になるんだ!？」ということがわかってもらえればさいわいです。

原 克 [はら かつみ] 先生の研究テーマは「**大衆文化とテクノロジー**」です。  
先生からのメッセージです。

携帯電話と恋愛行動、レンタルビデオと私的空間、自動販売機とライフスタイル、インターネットと世界認識。暮らしにあふれる日用品やテクノロジーを出発点として、現代の都市型住民の日常的身振りを〈ディスコース分析〉(文章の批判的検討)にかけ、現代が「便利な暮らし」という「科学イメージの神話時代」であることを具体的にあらわにしていきたいと思います。あらゆるサブカルチャー現象を正面からとらえ、背後にひそんでいる思想的構造をあばく表象文化論、これがボクの研究テーマです。

さて、原先生のもとで卒業論文を書いている藤掛さんの研究テーマです。

藤掛 幸宣 [ふじかけ ゆきのり] (学際コース 5年) さんの卒業論文のテーマは「**オートバイの表象と身体性**」です。

私は、オートバイの持つ表象と人間の身体性との関わりについて考察しています。

オートバイには多くの種類があり、それぞれ形状や機能が違います。またオートバイに乗る人に対してもある規範にもとづく服装や装備、姿勢などを要求し、身体性に大きな影響を与えています。

私はそれらの関係についての考察を通じ、今日オートバイに乗ることはどんな意味をもつか、まとめてみたいと思っています。

(藤掛さんはドイツに1年間留学したため、現在5年生で卒業論文に取りくんでいます。)

つづいては「**身体表象**」を研究テーマにする 神尾 達之 [かみお たつゆき] 先生からの自身の研究内容に関するコメントです。

みなさんの脳内には、お母さんの乳房から、格闘技ゲーム、プリクラ、コスプレ、アニメ、バイオホラー、フィギュア、モテ、モエに至るまで、小さい頃から今までにおびた数々の身体イメージがシャワーのように降りそそいでいます。

その一方で、20世紀から21世紀への転換期には、美容整形、ロボット、ES細胞、クローンなどをめぐって身体に関するテクノロジーが大きく変わりました。

いわばソフトの面でもハードの面でも、みなさんは人間の身体イメージの激的な変化の現場に立ち会っているのです。

私が担当する授業は、21世紀の最先端で生きている皆さんの脳と、18世紀以降の身体イメージを研究対象にしている私の脳とが触れ合うインターフェイスにしたいと思います。

神尾ゼミ（学際コース「現代文化演習」）で学ぶ

内田 康雄 [うちだ やすお]（学際コース 4年）さんの卒業論文

**「クロスメディア文化論」**は、次のようなIT時代にふさわしい内容です。

最近のTVコマーシャルは完結していません。コマーシャルの最後にネットの検索窓が出てきて、同じキーワードを入れると、つづきの情報がWebで見られるようになっています。

このようにTVというメディアとWebというメディアがつながる現象は《クロスメディア》と呼ばれ、同じメディア関係のコンセプトでも、メディア・ミックス（商品の宣伝効果を高めるために、出版・放送・映画・グッズなどを組み合わせること、たとえばディズニーの戦略）やマルチ・メディア（文字・音声・画像などをデジタル・データに一元化すること、たとえばパワーポイントのファイル）とは原理的に異なるシステムです。

この《クロスメディア》の出現によって、これまで僕たちがとってきた物事の感じ方や考え方が根っこから作り変わってしまうのではないか、という問題を僕は卒業研究であつかっています。

## 「こんな科目、こんな内容」

さて、ではそんな教員と学生の研究を作りあげていくために、どのような科目がおかれているのでしょうか。

ここでは、複合文化学科の専門科目について、それが、どのような問題を、どのような視点から考察していくのか紹介します。

今回は1年次の必修科目である**「複合文化学の建築物」**についてです。

**「複合文化学の建築物」は、1年次に履修する複合文化学科の基幹科目です。**

**半期4つの「建築物」から最低2科目履修します。**

半期2単位で、テーマ別にIからIVまで4つの「建築物」が開講されます。

この科目は、いったいどういうコンセプトで作られているのでしょうか。

まず、複合文化学科では、「概論」や「総論」、「基礎」や「入門」から入るのではなく、

具体的な問題を複合文化的な手法によって、多面的かつ多元的に分析することの〈面白さ〉をみなさんに感じてもらうこと、これをなによりも重要視していることを述べておきます。

つまり、「建築物」は、専門をうすめた「基礎」でも、文化一般を概観する「概論」でもありません。

「複合文化学があつかうのはたとえばこんなアクチュアルなトピックだー出来上がった料理のサンプルを味わうー」

という科目の理念が示すように、まさにそれぞれの問題系のもっともアクチュアルな研究成果の現在進行形による紹介なのです

それぞれの問題系はそれ自身複雑な内実をもっているのです、そうした問題自体の複雑さに対応して、〈複数の教員〉がみずからの研究成果にもとづいて多面的に分析します。

4つの「建築物」であつかわれるテーマは、以下のようなものです。

- I 知覚のメタモルフォーゼー聞こえ方や見え方、味わい方や感じ方にも歴史があるー
- II 他者たちのシーンー他人と他者ってどう違うの？ー
- III 文化というハイブリッドー〈文化〉は雑多のものから引き算して作られるー
- IV 自然というトポスー人工化されていない自然はどこにある？

たとえば「I 知覚のメタモルフォーゼー聞こえ方や見え方、味わい方や感じ方にも歴史があるー」では、つぎのような3つの問題系を手がかりにして、3人の教員が複合文化学の最新の成果を紹介します。

1. 「メディアとしての味覚ー食卓の変容から」
2. 「思想としてのポータブルー携帯電話で変容する世界認識」
3. 「追憶と記憶の政治学ー生きた歴史を語りつぐ」

今回はこのうちもっともむずかしそうな、

3番目の「**追憶と記憶の政治学ー生きた歴史を語りつぐ**」担当の  
現代思想を専門とする

高橋順一〔たかはし じゅんいち〕先生から、  
その内容の概略を紹介してもらうことにします。

歴史はけっして事実の単純な集積ではありません。

そこには人間のさまざまな営みやそれにとまなう悲しみや喜びなどの感情などが  
深くかかわっています。

なかでも重要な要素となるのが**記憶**です。

**記憶こそが歴史を人間化する**といっても過言ではありません。

ただ同時に記憶には**歪曲や消去・隠蔽が起こりうる**という性格がひそんでいます。

そのため、歴史を自分にとって都合よく利用するために

**記憶を作り変える**ということも生じます。

とくに20世紀の全体主義は自らの支配の強化のために

**「記憶の政治」ともいうべき手法**を作り出しました。

たとえば、ナチス・ドイツはユダヤ人を物理的に抹殺するだけでなく、  
ユダヤ人をめぐる記憶の抹殺までも企図したのです。

かつて全体主義国家であった日本もまた  
従軍慰安婦問題や靖国問題において記憶の捏造と隠蔽を行いました。

私たちは歴史を正しく認識するために

こうした**歴史と記憶のかかわり**をあらためて捉え返す必要があると考えます。

事実の表層にとどまらない本質的なものを見る目を養うためにも  
それは大切な課題となるでしょう。

## 「アジア・ビューティー」をどう学ぶ？

「複合文化学通信」第1号では、複合文化学という新しい学問を説明するために「アジア・ビューティー」を取りあげました。

ここでは、その「アジア・ビューティー」を例にとって、このテーマを深めるには、複合文化学科のどんな科目を履修すればよいか、説明してみましょう。

複合文化学科のカリキュラムは、一年次から四年次までの授業の積みあげが、総論や概論から各論や特論という方向ではなく、逆方向になっている点で、他の学科のカリキュラムと大きく異なっています。

まず、「複合文化学の建築物Ⅱ（他者たちのシーン）」を履修するといいかもかもしれません。アジア・ビューティーは中国人や日本人を〈他者〉とみなしてきたアメリカ人が作ったコンセプトだからです。

←「建築物」では、**複合文化学の成果を皆さんにお示しします**。「複合文化学を勉強するとこんな建物ができるんだ」ということをイメージしてもらうために、**いわばモデル・ルームを歩く**わけです。

アジア・ビューティーは自然発生的に生まれたコンセプトではなく、マス・メディアによって人工的に流通させられたものです。「複合文化学の開拓地Ⅲ（メディアと言語が作る複合的な表象を探る1）」で、複合文化学の隣接領域であるメディア論や言語論の知識も習得してください。

← 複合文化学は、誕生したばかりの、非常にダイナミックな学問領域です。領土はまだ確定していません。というより、領土を固定しないことが複合文化学の強みだとも言えるでしょう。「開拓地」は**複合文化学のいわばフロンティアを知るための授業**です。

アジア・ビューティーという個別現象を分析するためには、それなりのツールが必要です。「複合文化学の道具箱Ⅱ(表象文化領域)」では、いよいよ例の〈オリエンタリズム〉というタームを学びます。

←「道具箱」では、具体的な現象を分析するためのタームを勉強します。ここにはいわゆる現代思想用語のようなものも入ってきますが、不安になる必要はありません。**複合文化学科の特徴は具体性にあります**。抽象的なタームを説明する場合にも、常に「たとえば」からはじめるようにします。

道具だけしかもっていないと、分析はできても考察はできません。〈オリエンタリズム〉だけを切り口にしてアジア・ビューティーを分析しても、その結論は平凡なものになるでしょう。他の道具も使いながら、さまざまな分析結果を編集し整理し統合する方法について学ぶのが、「複合文化学の組立方Ⅱ（表象文化領域）」という授業です。

← みなさんは「組立方」を学ぶことで、**自分自身の力で建物を作ることができるようになります**。建てたい建物のイメージをつかみ（「建築物」、土地を買い（「開拓地」、金槌やかんなの使い方を学んだ（「道具箱」）あとは、設計図を書いてください。

さて、ここまでは「たとえば」アジア・ビューティーという具体的・個別的な現象に着目して複合文化学を学習してきましたが、最終的には「複合文化学の見取図（複合文化学の成り立ちと広がり）」という講義で、一般論の形で複合文化学をながめてみます。

これがいわゆる総論や概論にあたります。アジア・ビューティーを研究対象にしてきたあなたと、

ジャパン・クールで卒業論文を書いたあなたの友人が、ともに立っている国、つまり複合文化学という学問領域を上から見おろしてみよう、というわけです。

これらが複合文化学科の基幹科目ですが、講義科目としてはこれ以外にも「複合文化学特論」がもうけられています。「複合文化学特論 2 (華人ネットワーク)」や「複合文化学特論 5 (ハイブリディティ＝「混血」への眼差し)」を聴講すれば、アジアン・ビューティーを考えるヒントがあたえられるかもしれません。

講義は教師から学生への知識の伝達という一方通行の形をとりますが、みなさんが考えたことを発表し、教師や他の参加者からアイデアをもらったり、自分の意見を外側からながめて修正したりする場が演習です。複合文化学科では2種類の演習を用意しています。

ひとつは、「テーマ演習」です。一年生向けの演習です。アジアン・ビューティーに関心をもつ新入生向けの演習があります。「複合文化学テーマ演習 I-3 (中国 ざ・テレビジョン)」と「複合文化学テーマ演習 II-9 (〈他者〉発見のメカニズム)」です。日本のテレビではアジアン・ビューティーがブレイクしましたが、中国ではどうなのか、面白そうなテーマですね。〈他者〉発見のメカニズムとはまさしく〈オリエンタリズム〉のことです。

←「テーマ演習」では、具体的なトピックをあつかいながら、レポートの書き方、発表の仕方、ディスカッションへの方法なども習得します。

もうひとつの演習が、「複合文化学演習」です。アジアン・ビューティーについて発表したいならば、「複合文化学演習 1-I・II・III・IV (メディア・知覚・身体)」を選ぶといいかもしれません。

←「複合文化学演習」は、みなさんひとりひとりが設定したテーマにそって展開される演習です。  
**みなさんが建築物についてプレゼンテーションする場です。**

最後に、英語以外の外国語についてですが、これはやはりアジアということで、中国語がいいかもしれません。1年次の「中国語の基礎」「中国語のコミュニケーションの基礎」につづいて「中国語演習 I 1・I 2・II 1・II 2・III・IV」「ツールとしての外国語 I・II・III・IV」と履修して、中国語でアジアン・ビューティーにかんするデータを集めてください。

←1年次の「中国語の基礎」「中国語のコミュニケーションの基礎」は、中国語の基本を身につける科目です。これにつづく「中国語演習 I 1・I 2・II 1・II 2・III・IV」では、それぞれある文化的テーマについて中国語でアプローチします。**文化的なコミュニケーション力をつける科目です。**たんなる講読とはことなるため演習という名称になっています。「ツールとしての外国語 I・II・III・IV」では、まさに口頭でのコミュニケーションを中心に、使える中国語を学びます。

複合文化学通信 第2号 2006年12月25日発行

早稲田大学 教育・総合科学学術院 教育学部

複合文化学科 「複合文化学通信」編集部

(編集責任 / 福田育弘)

第3号は2007年1月5日に発行予定です。